

「愛」と「不自由」

[ヨハネの手紙一 4章 7～12節]

愛する者たち、互いに愛し合ひましょう。愛は神から出るもので、愛する者は皆、神から生まれ、神を知っているからです。愛することのない者は神を知りません。神は愛だからです。神は、独り子を世にお遣わしになりました。その方によって、わたしたちが生きようになるためです。ここに、神の愛がわたしたちの内に示されました。わたしたちが神を愛したのではなく、神がわたしたちを愛して、わたしたちの罪を償ういけにえとして、御子をお遣わしになりました。ここに愛があります。愛する者たち、神がこのようにわたしたちを愛されたのですから、わたしたちも互いに愛し合うべきです。いまだかつて神を見た者はいません。わたしたちが互いに愛し合うならば、神はわたしたちの内にとどまってくださり、神の愛がわたしたちの内ですべてなされているのです。

[1] 青年時代に会った沖縄出身の信仰の先輩のこと

今日は、特に沖縄のことを覚える日曜日ということですので、私も今日はまず沖縄の一人の友人のことをお話をさせて下さい。頭の片隅に覚えておいて頂けると嬉しいと思うんです。僕に決定的な影響を与えた人の一人なんです。

私が彼・兼浜政秀さんと出会ったのは、私が赤塚教会に通い始めた、まだ信仰を持たない求道者の時（大学1年の2月）でした。兼浜さんは、私より5才ほど年上で、沖縄本島から東京で新聞配達のアルバイトをしながら、その専売所に住み込んで、海外で日本語教師になる勉強をしていました。よく陽に焼けた大きな顔（沖縄の太陽のせい？）と、人なつっこい笑顔で、私が青年会のメンバーに加わるやいなや、大きな手で握手をしてくれました。私は讚美歌と青年会のメンバーの仲間たちが本当に生き生きと生きていたその姿に心動かされ、聖書にその秘密があると思い、私も自分なりに一生懸命聖書を読んだり、その交わりを喜んでいたので、信仰を持つことには抵抗はなかったのです。

ただ、一つネックだったのは私は「祈る」ということにとっても違和感があったのです。そんな僕の心が分かったのかどうだったのか、分からないのですが、ある時、教会の中で、兼浜さんから「一緒に祈らないか」と誘われたんです。「いやあ、いいよ」と言ったと思うんですけども、彼は「僕も一緒に祈るから大丈夫、後についてきて祈ってみて」と半ば強引に誘うんですね。仕方なく

続けて祈ると、どうもその祈りの最後は決心の言葉なんですね。「私の罪のためにイエス様が死んで下さったことを信じます。あなたを救い主として信じます。アーメン」。彼のその言葉をなぞりました。私は何かとてもモゾモゾした気持ちもあったんですけども、彼が「良かったね！」と嬉しそうに言うのです。あの時の祈りは心からの祈りだったとは言えないように思っているんです。けれども今は思います。あのようになんか導かれなかったら、私はその後も個人的に祈るということが出来なかったか、とても時間がかかっただろうな、と思います。…それから数ヶ月たって、私は本当に自分が神様の前に傲慢な自分であったということが分かり、イエス様を受け入れ、バプテスマを受けました。大学 2 年の秋でした。その時、青年会のメンバーたちが次々に握手をしてくれましたが、兼浜さんの手の握力の強さを忘れることは出来ません。

実は、この兼浜さん、一度はボルネオで働く時期もあったのですが、沖縄に戻り、ご結婚し、男の子も生まれ、私たち夫婦も沖縄を案内していただいたこともあったのですが（戦跡やガマも見せて頂きました）、その後 10 年ほど経ったとき、脳腫瘍の手術を受け、数年たって、主のもとに召されてしまったのです。まだ 40 歳代だったと思います。その知らせを電話で奥様から聞いたのです。（奥様は宮古島出身でやはり篤い信仰の方でした。）私はその頃 FEBC でずっと働いていましたが、FEBC のことを教えてくれたのも彼だったのです。「実は会社説明会を聞いたけれど、僕よりも勉の方が合っているんじゃないか」と言って勧めてくれて、その気になってしまったのですね。

彼が亡くなった翌年、私は奥さんから、教会の礼拝で彼のことをお話して欲しいと言われ、今のうるま市の教会に行ったことがあるんです。そうしたら、彼のご高齢のお母様も、ご兄弟も三人でしたか、集まってくれたのです。後で、政秀の東京でのことは知らなかったんだよと言い、涙を流されていました。

〔2〕「キリストのバカ」になりたい

その場所でもお話したように思うんですけども、兼浜さんはとてもシンプルな信仰を持っていました。彼の口癖があったんですね。それは「僕はキリストのバカになりたい」でした。キリストのためにおバカさんになりたい。兼浜さんは政治的なことはあまり語りませんでした。戦争はもちろん嫌いでしたが、沖縄は米軍と共存している現実もあります。声高に何かを発言することよりも、静かに燃えると言いますか、本当によく祈る人でした。そして、キリストがそうであったように、ひたすら愚直に信じていく、賢くこの世を泳いでいくよりもイエス様の御足の跡に従っていく、そんな生き方でした。話し方もいつも穏やかでした。そんな姿が、私の心にとってもインパクトを与えたんですね。

今日の箇所ヨハネの手紙一の4章を読んでいると、ちょっと彼の生き様を思い起こすんです。—「愛する者たち、互いに愛し合ひましょう。愛は神から出るもので、愛する者は皆、神から生まれ、神を知っているからです」(7節)。

「愛」の反対語は何でしょうか？ 色々言えると思いますが、私なりに考えたのですが、それは「不自由」ではないかと。自由がないこと。自由は、打算がないこと。差別がないこと。私たちの心はいつも計算ばかりしています。弟子たちと全く同じように「誰が一番偉いか」とすぐに考えたがる。家柄、学歴、所得、容姿、出身地、健康状況…様々な計りを私たちは持って、他人を、また自分を測ってしまうのですね。なかなかそこから自由になれない。不自由なのです。けれども、聖書の神様は、本当にそういったことから自由なお方なのです。ヨハネ一9～10節。

「神は、独り子を世にお遣わしになりました。その方によって、わたしたちが生きるようになるためです。ここに、神の愛がわたしたちの内に示されました。わたしたちが神を愛したのではなく、神がわたしたちを愛して、わたしたちの罪を償ういけにえとして、御子をお遣わしになりました。ここに愛があります。」

イエス様を送って下さったということは、神様は私たちをなんら差別しない、ということです。何故でしょうか？ 私たちは皆「神の子」だからです。例外はないのです！ あのヨハネ3章16節もそう語っていますよね。「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。神が御子を世に遣わされたのは、世を裁くためではなく、御子によって世が救われるためである」。

十字架の事実から見て、私たちはどれほど無条件に(!)神様から愛されている存在であるかが分かるのです。私たちはここに、一緒に立つことができます。「内なる差別」の心を超えて出来る筈なのです。「互いに愛し合ひましょう」とはそういうことです。主の愛を知れば知るほど、私たちはおかしな拘りからも自由にされるのでしょうか？ 自分の心を、み言葉を聞きながら点検して頂きましょう。差別の心がないか。傲慢な心がないか。それを正直に見つめることが大事です。その時に、私たちの心にイエス様の光が与えられて、何と自分がつまらないことを気にしていたのか、拘っていたのか、ということから自由にされるんですね。私も兼浜さんのように、「キリストのバカ」になりたいと思います。教会は「キリストのバカ」の集まりです。私たちのために本当にバカになって下さった方を忘れないで、与えられている関係・交わりを感謝しながら歩んで行きたいと思えます。私たちの「内なる差別」が様々な場所（沖縄だけではなく。国内も外国も）で露わになっています。だからこそ、祈って連帯してゆきましょう。

お祈り致します。